

## 【ポスター発表】

## 英国における脳損傷者の生活の質向上に向けたプログラムの展開

## ー ヘッドウェイ・イースト・ロンドンの取り組み ー

○ 神奈川工科大学 小川 喜道 (会員番号 4312)

キーワード：イギリス 高次脳機能障害 アート活動

## 1. 研究目的

脳損傷による高次脳機能障害のある人への支援は、我が国では各地の当事者団体の地道な活動に支えられ、また、都道府県の支援拠点事業の展開や、就労、教育、医療、福祉など多分野における取り組みが行われている。しかし、地域に暮らす一人ひとりをみれば、多様で個別の課題を抱えており、今後さらに広範な支援が求められる。高次脳機能障害は、外から見えにくく、また、認知・行動・コミュニケーションなどの困難を伴い、受傷前と現在の状態にギャップを感じ、周りからそれを意識させられ、大きなストレスとなっていることもある。今回、そうした社会との関係を作り出すプロセスの中で、自らに否定的なイメージを持つことなく、自信と尊厳を回復するための支援プログラムを英国のデイセンターの事例を取り上げ、我が国のこの分野の取り組みに向けた示唆を見出すものである。

## 2. 研究の視点および方法

英国の脳損傷者の支援の現状とプログラムを調査し、かつ実践者を日本に招聘し当事者支援団体との交流を通して、我が国の取り組むべき事項を検討する。

(1) 対象機関：英国、ヘッドウェイ・イースト・ロンドン<sup>注1)</sup> (以下、HELと略)

(2) 調査期間：2000年～2012年にかけて年1回程度、本機関を訪問調査

(3) 交流セミナー開催<sup>注2)</sup>：2015年2～3月に下記機関にて講演と意見交換会

・高次脳機能障害者への就労支援等を行っている事業所：ほっぷの森(宮城)、ケアセンターふらっと(東京)、えんしゅう生活支援net(静岡)、笑い太鼓(愛知)の4ヶ所

・障害者アートをそれぞれの形態で運営している機関：アートインクルージョン・ファクトリー(宮城)、エイブルアート・ジャパン(東京)、みずのき美術館(京都)、エイブルアート・カンパニー(奈良)の4ヶ所

以上を通して、HELの経緯、支援プログラム、アート・スタジオの機能について、一貫して運営に携わってきたHEL代表のミリアム・ランツベリー氏から聞き取り、上記セミナーを通じた日英情報交換事項を整理比較する。

## 3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針の各事項を遵守し、調査にあたっては公表されている資料、サイトを利用し、個人情報扱いは扱わない。また、ヒアリングでは、個人を特定する情報を収集しないこと等に配慮した。

## 4. 研究結果

## (1) 英国の脳損傷者の状況

英国における後天性脳損傷者(脳外傷、脳卒中、脳腫瘍、低酸素脳症、等を含む)は最小推計でも100万人を超えるとみられている。2011年度に脳損傷で入院した数は343,056人、ここ10年で脳外傷により入院した患者数は33.5%の増加をみている(NHS Health and Social Care Information Centre (England)、他)。このように英国では脳損傷者への医療、福祉への対応は大きな社会的課題となっている。

英国では1979年にヘッドウェイ脳損傷協会が設立され、現在では、英国内に120以上のヘッドウェイグループと支部が存在し、それぞれ、独自の運営と活動プログラムを発展させている。我が国と同様、イギリスも近年の福祉制度・政策は厳しい状況にあり、脳損傷者への支援においても円滑なサービス提供がされているとは言えない。

## (2) HEL の支援プログラム

HEL では、通所している人を“メンバー”と呼んでいる。“患者”ではなく、また“利用者”という呼称も提供者との主従関係となりがちなので使っていない。デイセンターは障害者自身を中心になって作っていくという考え方にに基づき、メンバーとスタッフの間の対等性を重んじている。そして、選択肢の限られた活動や管理的制約を外し、柔軟性のあるアプローチによりメンバーの関心に応えている。通常のデイサービスとしてのプログラムは、①アーツ&クラフト、②ディスカッション、③料理、④セラピー、⑤ゲーム、⑥野外活動、⑦興味のある場所への旅行、が挙げられており、アウトリーチの支援を含むその他のサービスとしては、⑧セラピー、⑨アドバイスとアドボカシー、⑩家族支援、⑪若者グループ、⑫就労プロジェクト、⑬週末開催の懇親会、などとなっている。

## (3) HEL のアート活動

アート活動に意義を見出している理由は、この活動が大多数の人にとって初めての経験であることが多く、また、受傷前と現在を比較することもない。作品としての成果物があることで、達成感を生じる。そして、何よりもアートの良さは、高次脳機能障害のある人の“自己表現”をする場になることである。今回の交流セミナーでは、HEL メンバーのアートを巡る会話が映像で紹介され、コミュニケーションが生じる場であることが理解された。アート・スタジオはいつでも通ってくることができ、個人作品を制作することもあれば、共同作品として大作の造形に取り組むこともある。

## (4) わが国のアート活動との交流

一方、我が国でも各地で創作活動が展開されている。ほっぷの森（仙台）を運営している白木福次郎氏らの手で、アートインクルージョンの活動が展開され、その工房では障害のあるアーティストが自らの作品を紹介。ケアセンターふらっと（世田谷）では、美術を専攻していた当事者が絵画教室の講師として活動しているところに参加、仕事の終了後にヒアリング。浜松のえんしゅう生活支援 net のセミナーでは、二人の当事者が自分史を語り、その中にそれぞれのアート活動がスライドで示された。笑い太鼓（豊橋）では、通所している方々と共に書道を体験した。エイブルアート・カンパニー（奈良）では、障害者のそれぞれの個性を十二分に発揮しているアート活動に触れ、アートに関する論議をすることができた。こうして、各地でアートを巡る交流は日英双方に刺激を与えた。なお、日英の生活支援に関する比較整理は発表時に報告する。

## 5. 考察

HEL は、「アートによって脳損傷者は自分自身を表現し、自らの価値を見出すことができる」とし、ここ 10 年以上をかけてアート・プロジェクトを構築してきた。その中で、障害あるアーティストも互いに支援し合っている。そして、最近ではアートがヘッドウェイの収入創出の一助となってきていることが報告された。我が国においても、一般アート市場に結び付ける諸活動が行われており、今後は企業とのコラボレーションや知的財産の管理等が積極的に検討されていくことになるだろう。

現在、HEL が重点的に行っていることは、①脳損傷及びその影響についての啓発活動、②ヘッドウェイ及びその活動の認知度の向上、③脳損傷を負った人々、並びにその家族に対するより良い支援とサービスのためのキャンペーン、④幅広いサービスの提供、であるが、我が国も同様の事項に取り組む必要があることは共通である。

今回実施したセミナーにおいて強調されたことは、メンバーが活動の中心にいるということ。そして、事業者はメンバー中心のサービスを提供しなければならないこと。ありのままのその人をまずは受け入れ、他者から認められる経験を積み、人々から尊重されるということ。これらは、英国の Person-centred approach のコンセプトを具現化したものと理解できる。

- 【注】 1) ヘッドウェイ・イースト・ロンドン HP : <http://www.headwayeastlondon.org/>  
2) セミナーの開催に当たっては、大和日英基金の奨励助成により実施